

どぼくと市民社会の距離を縮めるには

●CNCP はあなたが参加し楽しく活動する場です●

今月のひとこと

CNCP 活動の見直しを検討するなかで、NPO の役割として“市民社会とのつながり”をきちんと意識して取り組むべきだという意見が強く出されました。

NPO のプロと言われる方からみれば、何をいまさらと思われるかもしれません。

しかしこのコラムで何度か取り上げてきたように“土木という世界と市民社会とのつながりがなぜ希薄なのか”ということ意識して考えたいと思うからです。東日本大震災の時に“想定外”という言葉が飛び交ったことを皆さん覚えておられるでしょう。そして防災の世界で想定外があってはいけない、ということから、L1,L2 津波という発想が出て、細分化が進む工学の世界で相互の連携が必要であることも議論され、工学連携のワークショップも実践されました。なぜ“想定外”が生じるかといえば、技術者が自分の狭い技術領域に閉じこもり、その領域外のことが発生すれば、それは自分の責任ではない！と言い訳をしてしまうから。最後に、私たち土木技術者の立場は、一つは設計・施工者であり、二つは事業者であり、三つは“家に帰れば一市民”であるという原点に立ち帰る、すなわち土木工学は市民工学に他ならないという議論に発展しました。こういう議論は、大震災後の土木学会倫理規定に反映されています。

(代表理事 山本卓朗)

Vol.46 コンテンツ

巻頭言	CNCP の3年間を振り返って	花村 義久	2
コラム	今こそ建設業維新 未来に向けて	星野 隆幸	3
トピックス	動きだした(略称)休眠預金等活用法	有岡 正樹	4
明治 150 年企画(6)	明治の元帥陸軍大将・大山巖公と郷里の神社	和田 恵	5
会員紹介	社会基盤ライフサイクルマネジメント研究会(SLIM ジャパン)		7
シドニー視察旅行記(3) ~ 首都キャンベラへ向かう幹線ハイウェイ ~		宮下 裕美	9
会員からの投稿	会津藩の医者 加賀山翼(後編)	三井 もとこ	11
部門活動紹介	インフラに関わる“市民参画”における市民・自治体の理解啓発	皆川 勝	13
サポーターからの投稿	私のライフ&ワークとCSR	飯島 玲子	14
お知らせ	CNCP アワード「市民社会を築く建設大賞 2018」		15
お知らせ/事務局通信	NPO ファイナンス研究会セミナー開催予定		16

CNCP の3年間を振り返って

(特非) シビル NPO 連携プラットフォーム

副代表理事 花村 義久



平成26年 CNCP が設立して3年以上が経ちました。当 NPO ではこれを機会にこの3年間の組織、事業を見直し将来を展望し、新たな体制を作ろうとしています。昨年8月見直しワーキングチームを作り、月に一回のペースで会議を持ち検討、議論を重ね、内容はほぼ固まりました。その内容は別の機会に改めて発表するとして、ここでは3年間を振り返る過程で改めて気付いたことの中から基本的なところを2、3上げさせて頂こうと思います。

CNCP は、設立趣旨においてサードセクターであるという位置づけをしました。一般に、行政組織等第一のセクター、民間営利組織の第二のセクターに対し、公益的活動をベースとする民間非営利活動組織を第三のセクターとしていますが、我々も行政、企業と並ぶ第三の担い手になりたいと考えました。この三者の連携、協働関係の検討を進めるにつれ、これらがいかに緊密な関係にあるかを強く感じました。この市民社会において、行政に対して我々はどのような役割を果たすのか、企業とどうやって価値観を共有しまた理解し合うのか、的をえた仕組みによって新たな可能性が生まれることを期待するものです。

当 NPO は、社会性と組織を支える収益事業との観点から社会的事業を重視しています。一方、最近企業においても社会的責任が求められることから、当 NPO でも社会的事業において共有する面があるのではないかと考えるようになりました。CSR は以前の初歩的な段階から、今ではビジネスを進めるうえで自然環境や社会環境を守り社会から信頼される企業にするという考えになり、持続可能性に対する価値観を認識することが大切になっています。これは最近 CSV という考えに進化してきています。CSR は収益を基本とする本業に対する考えが欠落していることから、CSV という考えが出てきました。共有する価値の創造という考えに基づいて、本業を社会的な価値を高めながら企業の価値（利益）を同時に実現しようとするものです。本業が強い社会性を持つ建設業、CNCP はその中で社会的事業を共通のテーマとして構築していきたいと考えています。

市民とのかかわりも考えさせられる面を持っています。民間非営利団体は、クライアント（顧客）の多様なニーズにどう応えるかという点では企業と同じ立場にあります。ドラッカーは、「企業（或いは団体）と使命と目的を定義するとき、出発点の一つしかない。顧客である。」と言っています。この顧客は誰で、何処にいて、どのようにして自分の欲しいものを手に入れているのかが問題になります。土木学会では JSCE 2015 で「JSCE2010 では顧客は<会員>であったが、究極の<顧客>は<市民>であるとの定義の大きな転換を行った」としました。この学会に対して、利用者であり納税者である市民と発注者である行政という2重構造を持つ建設業者にとっての顧客、多様な主体と様々なサービスが求められる非営利活動組織である NPO、どう顧客を位置づけ向き合うのか、まだまだ議論の必要があると感じています。

3年間の運営では、当 NPO のマネージメントの体制は素朴な形で対応出来ました。しかし今後の事業計画を想定した時、非営利活動組織とはいえ一般の経済社会レベルのマネージメント能力が求められます。マネージメントの基本的な考え方、さらに実務的能力の向上に努めなければならないと思います。中でも、資金の調達とその運営は最も重要な課題の一つです。また、紙面の関係でここでは中間支援組織の問題には触れませんでした。ある意味では中心課題であるともいえます。

CNCP は、今回の見直しの成果を実現すべく、組織の総力を挙げて今後に向かう所存ですが、関係の方々には一層のご理解とご支援をお願いする次第です。

今こそ建設業維新 未来に向けて

個人正会員 **星野 隆幸**



平成 30 年は、明治元年（1868 年）から起算して満 150 年に当たります。

CNCP でも「明治 150 年企画ワーキング」でご存知の事でしょう。また内閣官房「明治 150 年」関連施策推進室の HP によると、この「明治 150 年」をきっかけとして、明治以降の歩みを次世代に遺すことや、明治の精神に学び、日本の強みを再認識することは、大変貴重な事です、となっている。それはつまり、「明治 150 年」は、明治元年以降の近代日本を再考する事であると確信します。

明治時代は、江戸時代が終焉を迎えた事で始まった時代になるので、明治元年を語る上で外す事が出来ない、幕末の若者について考えてみた。

尊皇攘夷、徳川幕府擁護等幕末の時代に生きた若者は何を考え、何に絶望し、何に希望を見出したのだろうか、命を掛けてまで 10 代、20 代の若い彼等を動かした、その根本にあるものは何だったのだろうか、外国からの訪問者が鎖国から開国へと日本の国を変えようとしているそんな騒然とした時代の中で彼等は、未来の日本の何を信じようとしていたのだろうか。

今の政府は、外国人観光客を増やそうとキャンペーンを行なっている、不足する宿泊場所を確保するために、民泊を増やそうと規制を緩和した、まるで、明治維新の時のように、そして現在沢山の訪問者がこの国を訪れている。

明治維新では侍が、新しい時代を作ろうとしたが、現在は一般の庶民が先頭に立って何かを変えようとしている。政府は観光客だけでなく、働き手としての来日も歓迎している、宮崎県の建設業者の中には留学生向けに、建設技術を指導し建設業界に技術者として就職させようとしている企業も現れた、まるで、介護医療の外国人ヘルパーのようだ、対外的には新事業で受けがいいのだろうが、結局日本人に建設技術者を希望する若者がいなくなっている事の裏返しでしかない。

少し前のこと高校の進路指導教諭と話す機会があった、建設業に若い技術者が不足してこのままでは建設業が維持できなくなるので、ぜひ建設業界へ就職をお願いした事がある、その時、先が見えず、昔から 3k と言われ、休みも少ない建設業界に大事な生徒を勧めることは出来ないし初めから就職先として考えに無いと言われた、それが現実なのだ。

官民一体となって本気で、建設業界の改革、特に働き方改革に取り組みないと建設業界の未来は真っ暗になってしまうと危惧している。

幕末に明治維新が起こったように、今度は若者のため今後の建設業界のため、少し年取った昔の若者たちが先頭に立って建設業維新を起こして欲しいものだ。



動きし出した (略称) 休眠預金等活用法



CNCN 常務理事・サービス提供部門長 有岡 正樹

この1月より「民間公益活動を促進するための休眠預金等に係る資金の活用に関する法律」(平成28年法律第101号として2016年12月2日に成立、以下休眠預金等活用法)が施行され、内閣府が民間公益活動促進のための休眠預金等活用に関する業務を担当し、金融庁が休眠預金等の各金融機関から預金保険機構への移管、預金者への返還に係る部分を所管することになった。2009年1月1日以降10年以上取引のない預金等(休眠預金等)は、民間公益活動に活用されることとなる。

CNCNでは「休眠預金等活用の基本方針策定に向けた地方公聴会」に参加する機会があったので、法が施行されたのを機に、NPOファイナンスシリーズのテーマとしてその概要を紹介しておきたい。

1. 法制度化の経緯

2014年4月休眠預金の社会的活用の重要性への認識を共有する国会議員が集い、その法制化を推進するため「休眠預金活用推進議員連盟」を設立し議論を重ねて、2016年5月に議員立法法案として国会に提出、衆議院財務金融委員会で審議され、同年11月可決、12月に法として成立したものである。

その後休眠預金等活用審議会によりその施行に必要な基本方針策定の検討がなされ、2017年9月にまとめられた「議論の中間整理」に基づき上記の地方公聴会が、9月20日~10月2日にかけて東京、大阪他5都市で開催された。その後2ヶ月で6回の審議会が集中開催され、12月26日の第10回審議会でその施行案がまとめられ、本年1月の施行に至った。

2. 活用の意義と仕組み

諸外国では、休眠預金を国庫に組み入れられたり、福祉事業等に限って活用している例もあるが、我が国においては、払戻額を差し引いても毎年700億円程度にもものぼる休眠預金等は、①預金の公共的役割等に照らし、②「人口急減・超高齢化社会」到来に備えて、それを活用し、広く国民一般に還元することとしている。

休眠預金等の移管・管理・活用の仕組み

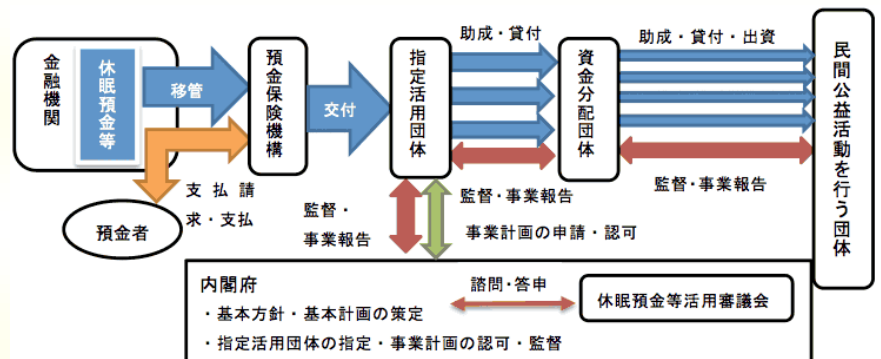
みは上記議員連盟ウェブサイト「法律案概要」によれば右図の通りである。その活用分野としては、

- ① 子ども及び若者の支援に係る活動
- ② 日常生活又は社会生活を営む上での困難を有する者の支援に係る活動
- ③ 地域社会における活力の低下その他の社会的に困難な状況に直面している地域の支援に係る活動

の3分野と、それに準ずるものとして内閣府令で定める活動を上げている。

3. 今後の方向

法の施行は基本方針の確定後が通常だが、それがずれて3月末になるとの予定でもあり、まだ社会の関心は大きくない。ガイドラインの作成などを得て動きだすまでには、いまだ少し時間が掛かりそうである。民間公益活動の範囲、「顔の見えない」貸し手、指定活用団体の役割と位置付け等、試行錯誤的な段階を経て、外部資金や社会的投資の呼び水となるような制度化を期待したい。





日刊建設通信新聞社 代表取締役社長
CNC 個人正会員 和田 恵

JR線の有人最南端駅に山川駅がある。鹿児島県薩摩半島を走るJR指宿枕崎線の半島東端にある駅だ。そこから西方に大山駅、西大山駅と続き、さらに15駅目が終点で最西端の枕崎駅となる。ちなみに、大山駅は筆者の生まれ在り所・大山集落にあり、隣駅の西大山駅は無人を含むJR全駅の最南端に位置、秀麗「薩摩富士」の愛称を持つ日本百名山のひとつ、開聞岳を望む立地と相まって、「JR日本最南端の駅」の案内標識と開聞岳を背景に写真撮影する観光スポットとなっている。

前置きはともかく、ことしのNHK大河ドラマは明治の偉人・西郷隆盛の生涯を描く「西郷(せご)どん」だが、その西郷翁にゆかりの社(やしろ)が大山集落にある。土地の方言で「うやま・じんじゃ」と呼ぶ大山神社である。その大山神社は西郷と従兄弟で、わが国初の元帥で陸軍大将・大山巖の祖である「大山氏」を祀る、いわゆる大山家の氏神である。老朽化もあり一昨年の台風16号で被害を受け、約100年ぶりに社殿が改築された。この大山神社、明治150年にちなむ本稿の題材に相応しいと思い、紹介することにした。

大山集落は薩摩半島の南端にある、世帯数約400戸、人口1000人弱の限界集落への転落が懸念される村である。筆者が子どもの時分は南薩地域の要衝に数えられ、みんな小規模ながら農協、郵便局、交番、小学校、保育園などの公共施設を始め、旅館や食堂、商店、パチンコ店、呉服屋、床屋・美容室、自転車屋、電気店、書店などがいずれも複数店あり、大山神社の境内では村祭りや、屋台など出店が繰り出す牛馬の競り市が年に数回開かれ、筆者らのチャンバラごっこの舞台でもあった。それもつかの間、高度経済成長の終焉とともに人口減少の波にはあらがえず、今ではひなびた寒村をあらわにしている。

一方、大山巖は〈明治時代の軍人。天保(てんぽう)13年10月10日生まれ。幼名は弥助(やすけ)。1862年(文久2)大坂に出て倒幕運動に参加。薩英戦争でイギリス艦の大砲の威力を認識し、戦後、江戸の江川塾で砲術を学ぶ。戊辰戦争に参加し、新陸軍下では、1870年(明治3)に欧州に派遣される。また、翌1871年11月から1874年10月までフランスに留学。西南戦争には別働第一旅団司令長官として出征。陸軍軍制のフランス式からドイツ式への移行期の1885年、初代陸軍大臣となる。1891年陸軍大将、枢密顧問官。日清戦争には第二軍司令官として出征。1898年元帥。日露戦争には満州軍総司令官となる。1907年(明治40)公爵。長州藩出身者が陸軍首脳部を占めていたなかで、陸軍の最重要官職に長期間就任できた理由として、茫洋とした人柄や藩閥的偏狭性の希薄さが指摘されている〉(「日本大百科全書」の解説より)

薩長と会津の犬猿は有名だが、大山巖も戊辰戦争では薩摩藩二番砲兵隊長として鶴ヶ城攻撃に従軍、そのとき鶴ヶ城に山本八重らとともに籠城していた山川捨松を後妻として迎えているほか、〈西南戦争をはじめ、相次ぐ土族反乱を鎮圧した。西南戦争では政府軍の指揮官(攻城砲隊司令官)として、城山に立て籠もった親戚筋の西郷隆盛を相手に戦ったが、大山はこのことを生涯気にして、二度と鹿児島に帰る事はなかった。ただし西郷家とは生涯にわたって親しく、特に西郷従道(隆盛の弟、筆者注)とは親戚以上の盟友関係にあった〉(ウィキペディア「大山巖」より)などの因縁を持つ。

ちなみに、山川捨松とは病死した先妻の岳父に紹介され縁を結んだもので、一線を退いてからは栃木県那須の別邸で農業を営みながら生涯を終えた。また、第二次世界大戦直後、多くの軍人の銅像が撤去される中、大山巖の銅像だけは撤去を免れたが、日本を統治したマッカーサー元帥が自室に大山巖の肖像画を飾っていたほどの大山ファンだったからという話もある。いわゆる敵方にも一目置かれる大山の人柄がにじむエピソードといえる。

さて、大山神社である。改築された社殿横に大山区と大山郷土研究会の手による「大山神社の由来」説明板がある。まず、以下は全文である。

この神社は、大山の人々の「長寿・幸い」を祈願するとともに、積極的な「地域づくり」をも祈願する大事な社(やし)です。

その歴史は、鹿屋市(かのやし)大始良(おおあいら)にある西俣(にしまた)城(じょう)に始まります。この城は戦国時代、島津家の家臣団の一人・佐々木氏が護っていましたが、激しく対立していた肝付(きもつき)氏(し)の猛攻にあい、落城してしまいました。結果、薩摩半島への敗走が始まりました。佐々木氏主従は、まず浜児ヶ水(はまぢよがみず)に船で上陸。そののち大山の端・松風の吹き渡る城ヶ崎(ぞがさつ)に落ち着き、やがて発展性のある大山に定住しました。

佐々木氏を頂点とする家臣団は、大山の先住民たちとよく協力して、地域の開拓に営々と努力を積みかさねてきました。その数十年後、家臣団の心のよりどころとして「佐々木神社」を創建しました。佐々木家の「氏神」としての創建ですが、歴戦で亡くなった多くの先祖を弔い、さらなる発展を祈願する意味があったのでしょうか。

この氏神は、やがて佐々木氏が「大山氏」と名称変更するに及び、「大山(うやま)神社(じんじゃ)」と称されるようになりました。大山の地に住むすべての人々を祭る神社になったのです。このころにはまた、隣接地に学問寺の「正護寺(しょうごじ)」を創建しました。山川湊の正龍寺(しょうりゅうじ)の末寺としての位置づけですが、この神社と寺院で、大山の文化は一段と向上したといわれています。

佐々木(大山)氏は、その後、伴(ばん)姓(せい)穎娃(えい)氏(し)に仕え、開聞上(かいもんかみ)仙田(せんた)に移住しました。穎娃氏が加世田の島津日新公に仕えるようになると、加世田へと移住。さらに、日新公の子どもたちが鹿児島島の島津本家を継承するや、鹿児島城下に移住しました。この家系から、やがて元帥・大山巖が誕生しました。

大山家の子孫は現在、この地には残っていません。しかし、大山の人々は永年、この神社を自分たちにとってかけがえのない神社として大切にしてきました。ここの境内で六月(ろくがつ)灯(とう)などの伝統行事が続けられてきたのも、こうした経緯があったればこそです。今後とも、住民すべてで、その前向きな「大山魂」を引きついでいきたいものです。

なお、戦前までは、東京の大山家で代替わりがあると、新しい当主が大山神社に参拝して報告を行うものだったといわれています。

大山神社近くには、旧佐々木神社の王座跡、大山巖の次男・柏(かしわ)の渡欧記念碑「大山柏閣下渡欧」、日露戦争下で大山巖の満州軍総参謀長を務めた児玉源太郎を祀る児玉神社(山口県周南市)の氏子から寄贈された「台湾五葉松」など、巖ゆかりの碑なども建てられている。

大山巖が戊辰戦争を戦ったのは26歳、また西南戦争に突き進む西郷隆盛を思いとどませようと説得に赴いたのが32歳のときである。日清・日露戦争等で武勲をあげるも、西南戦争以降は一度も鹿児島島の地を踏むことはなかったが、1916(大正5)年12月に享年75で那須の別邸で死去する直前、意識朦朧の中で「兄さあ」とうわごとを言うと、妻捨松は「やっと西郷さんに会えたのね」と大山に話しかけたという。

郷里・鹿児島の大山出身者による県人会「関東大山会」の懇親会が毎年4月に開かれる。名簿登録者は84人で、年齢60代の筆者など若手の部類だが、関東に暮らす大山出身者は1000名を下らないという。一方、大山巖の那須の別邸は現在、「大山記念館洋館」と「大山農場」として残され、見学できるようになっている。ことしは明治150年。その明治にちなんで、ことしの4月は大山郷土研究会と関東大山会の有志で那須の施設を訪ね、墓前で社殿改築の報告を行い、幼年期から青年期を西郷とともに駆け抜けた大山巖公を偲ぶ予定である。



ネットブログ「日本最南端の駅！！今はJR最南端の駅に(笑)」より転載

◆ 会員紹介

社会基盤ライフサイクルマネジメント研究会 (SLIM ジャパン)

～インフラメンテナンス技術者セミナー（第1回）開催報告～

◇プログラム

平成29年12月19日に、主催インフラメンテナンス国民会議、共催SLIM Japanによるインフラメンテナンス技術者セミナー（第1回）が開催された。

第1部 NEXCO-West USA, Incの取締役社長松本氏の特別講演「インフラ点検技術での海外展開事例」と、第2部パネルディスカッション「フロントティア領域にチャレンジするインフラ技術者の活躍に向けて」の2部構成で進められた。

国民会議では、確実かつ効率的なインフラメンテナンスを実現するためのインフラメンテナンス革命に積極的にチャレンジする人材を応援している。今回、その一段として技術革新や海外市場展開、地域連携などフロントティア領域で取り組んでこられた方々を招き、インフラメンテナンス技術者セミナーを開催した。全国からは企業、行政、学会、大学、学生、と約120名と多くの方々が参加した。パネルディスカッションでは、4人のパネリストによりそれぞれの立場からインフラメンテナンス技術の伝承と、海外事業の展開と人材育成にフォーカスして議論を頂いた。また、会場からは海外にチャレンジしている

企業・学生インターン生、女性技術者、さらに東南アジア現地で技術者を養成している企業経営者から積極的な意見が交わされた。

まとめとして、今後、技術者育成と海外フォーラムと連携して、各分野の事例を紹介しながら魅力あるインフラメンテナンス市場の確立に向けて、最前線技術者がより多く参加できる継続セミナーとして進めて行くことと提言した。

- 挨拶 国土交通省 総合政策局 官房技術参事官 奥谷 正 氏
- 第1部 特別講演:『インフラ点検技術での海外展開事例』
NEXCO-West USA, Inc 取締役社長 松本 正人 氏
- 第2部 パネルディスカッションと会場トークセッション
パネリスト: NEXCO-West USA, Inc 取締役社長 松本 正人 氏
山口大学 名誉教授 宮本 文穂 氏
総合政策局 国際建設管理官 天野 雄介 氏
パシフィックコンサルタンツ(株) (株)パデコ出向)
松月 さやか氏
コーディネーター: 技術者育成フォーラムリーダー 鈴木 泉 氏
- 閉会挨拶 NPO法人 社会基盤ライフサイクルマネジメント研究会
副理事長 中村 裕司 氏



講演者



パネリスト



第1部：特別講演「インフラ点検技術での海外事例」

- 2011年1月より米国ワシントンDCに拠点を置き、北米及び南米のインフラに対してNEXCO西日本グループの道路非破壊検査技術を適用すべく事業を展開している。また、同様にインフラ技術で海外進出を考えている日本企業の支援や、海外の優れたインフラ技術の日本への導入に関する支援を通じ、インフラ技術のグローバル化への対応を促進している
- 2017年までの活動経過について紹介。当初3年は米国での実績作りのためパイロット事業との位置づけで無償で経験を積む。大学や官公庁を巻き込み共同研究しながら論文等を発表し市場の信頼を獲得する。
- 海外でも活躍できる人材育成にも取り組み、NEXCO-USA道場を開設し、企業、自治体、学生インターシップ受け入れも行っている。

第2部： パネルディスカッションの3つのセッションの一部を紹介する。

セッション1. 松本氏の特別講演を軸に各パネリストから話題提供と活動紹介となった。

セッション2. 「人を育てて、技術を繋げて行くとは」「なぜ海外でうまく行ったか」「海外フォーラムを進めるに当たっての期待感」「今後の目標」など各パネリストより議論が交わされた。

- ① 海外の大学で学ぶチャンスを活かし、異分野の連携を受け入れることも肝要である。
- ② 技術力に加えて市場に合わせたカスタマズが必要である。交渉力、人間性、語学力など備えた人材が求められる。海外展開の成功するための教科書はない。
- ③ 海外の法制度にも適用する本質な技術を磨くべきで、パッケージングする技術力が求められる。国内外を分けすぎないキャリアステップ形成が望ましい。日本・相手国の両者が相互理解を深める教育が必要である。
- ④ 若手も活躍できる枠組みづくりを。日本人の性格(勤勉性など)は海外でも評価されている。積極的に進出することで海外展開の素地作りが必要だと思う。

セッション3. 「NEXCO-USA 道場体験談、期待」「海外にチャレンジしている企業」など

話題として、会場からとパネリストと活発なトークセッションとなった。今回の進め方で、会場とのトークセッションの形式を取った効果として幅広い意見の共有が出来た。アンケート集計からは、「若い世代が多く参加できたのが良かった。」「若い技術者に伝える有意義なセミナー」「海外で必要とされるインフラ技術のニーズを知りたい」「より多くの企業から意見を聞きたい」「学生が参加できる窓口を広げてほしい」など多くの感想、要望があり今後の運営企画の参考となった。



会場とのトークセッション

SLIM ジャパンとしては、インフラメンテナンス技術者セミナーの運営に今後も積極的に参画しますので、CNCP 通信の読者の皆らもご意見などご協力頂ければと思います。

(特非) 社会基盤ライフサイクルマネジメント研究会

副理事長 鈴木 泉

URL <http://slim-japan.org/>

シドニー視察旅行記（3）

～ 首都キャンベラへ向かう幹線ハイウェイ ～

CNCP サポーター

NPO 法人 SLIM ジャパン 事務局長 **宮下 裕美**



2 日目は、最初の視察地として首都キャンベラを訪れることになった。「首都都市」として有名であるが、その視点での都市の成り立ちについては次回三井元子さんが投稿されることになっているので、私はシドニーから約 300km 離れたキャンベラまでの道路交通について記しておきたい。

1. オーストラリアの州構成と三大都市

オーストラリアは、New South Wales(NSW), Victoria(VIC), Queensland(QLD), West Australia(WA), South Australia(SA), Tasmania(TAS) の 6 州と、Australia Capital Territory(ACT: 首都特別地域), Northern Territory(NT) の 2 準州 からなっている。今回訪問のシドニーは NSW 州の州都で、人口 500 万人(2016 年 6 月現在)のオーストラリア最大の都市であり、NSW 州の北隣 QLD 州の州都ブリスベンと Pacific Highway(790km)で、また、西隣の VIC 州の州都メルボルンとは Hume Highway(840km)でそれぞれ結ばれている。今回の視察旅行はオーストラリアの道路事業とその維持管理について学ぼうとの趣旨であったので、この 2 大道路は見ておきたいところであったが、休日のハンターバレイのワイナリー訪問の時間調整がつかず、Pacific Highway はあきらめることになった。



今日訪問するオーストラリアの首都キャンベラは、NSW 州の中に飛び地のようにして設定された ACT の中にあり、Hume Highway でシドニーからは約 300 km、メルボルンからは約 600 km の距離である。

2. シドニー～キャンベラ間の道路交通

もう 30 年前のことである。1988(平成元)年 7 月の七夕の夜、熊谷組海外事業部豪州支店への転勤となった。その後 1993 年まで約 4 年半の駐在員生活を送ったが、当時の熊谷組はキャンベラの南、オーストラリアン・アルプスと呼ばれる山岳地帯(最高峰コジオスコは 2,228m)にある一大スキー場で、PPP 事業として“スキューブ”と称するトンネルを掘って、山岳鉄道を運営していたこともあり、その途上も含めて何回かキャンベラも訪れたことがある。

朝 7 時。ホテルに熊谷オーストラリアで手配してくれた Frontier Photographic Safaris という個人経営の観光案内会社のマイクロバスが迎えに来てくれた。運転手は、Mr. Craig Figtree (イチジクの木との意) という名のれっきとしたオージー(豪州人)だが、日本に長く住んでいたということで、日本語で案内してもらえというオマケもありがたかった。今日の同行者としては、先月この記に投稿された秦善寺氏と、昨年の 4 月から NSW 大学に研究生として留学中の神戸大学工学部准教授の秋田先生が現地参加され、10 人の日本人グループである。



旅路はシドニー市内から約 300 km、途中 2 カ所ほどで朝食と休憩を入れての片道 4 時間ほどかかる長距離ドライブである。シドニーを出て Hume Highway を走るが、写真にあるように多少の起伏はあるが、ユーカリの林と牧草地帯とが交互に現れるような退屈なドライブが続く。歴史的には、19 世紀初めから Great South Road として建設が進められ、約 100 年後の 1928 年に Hume Highway と名付けられて名実ともに NSW 州南部の主要道路となった。その後 1960 年代に入って、その複雑な線化やバイパスの建設など毎年数百億円レベルの投資が続けられ、2013 年に現在の幹線道路が整備された。構造的には片側 3 車線を原則とし、中央には幅数十メートルの中央分離帯を有するので、道路全体では優に幅 100m を超えてブッシュファイヤーの拡大低減にも役立っている。



そんな Hume Highway を 2/3 ほど進み Goulburn を過ぎ、左へ別れて Federal Highway に入ると間もなく広大な草地が目に入って来る。Gorge Lake と呼ばれる湖で、地図で見ると琵琶湖位の大きさに水色で示されている。いつもキャンベラに来る度に見る光景だが、右写真に見るように湛水しているのを見たことがない。牛がのんびりと草を食べているのを見ながら首都キャンベラが近いことを知る。遠くの小高い山の上には、数えられないほどの風力発電風車がかすかに見える。ウランの産出、輸出国でありながら原子力発電を認めていない国の挑戦を見る思いがした。

3. キャンベラのまち

ほぼ 4 時間近く走ったことになるが、30 年前の Federal Highway は道路幅も狭く、時折カンガルーを見ることもあり、ウォンバットの無残な屍があつたりもしたが、今回はカンガルーバーを装備した車を見かけることも少なくなっていた。キャンベラ市内に入り相変わらず車も人通りも少ない道路を通過して、Lake Burley Griffin という人工湖の噴水の横に新しく建設されたインフォメーションセンターに寄ったが、立体模型地図なども展示され、ずいぶん分かりやすくなっていた。その地図によると国会議事堂を中心に 3 本の放射線が基軸になっている。それに結び付けてのいくつかのミニ放射線道路が配置されて、幾何学的に都市の形状がデザインされており、いかにも人工都市との趣が強い。

そんな首都都市の状況は次回に譲るとして、いかにもオーストラリアらしいエピソードに触れておきたい。新しい国会議事堂の地下駐車場を探していて通りかかったパトカーに入り口を訊ねたところ、“ついてこい” とばかりに駐車場の中まで先導してくれて、ちょっとした VIP の思いを味わうことができた。そのあと戦争記念館や Mt. Ainslie という小高い丘に登りキャンベラの街を一望した。標高では 850m というから、キャンベラ自体はほぼ 700m という高地に位置することになる。冬には氷点下も経験することがあるようだ。その山頂も、もちろん上述の基軸の延長にある。



それらを見終えてキャンベラからシドニーに向かったのは午後 5 時を回っていただろうか。キャンベラを離れてしばらくすると雲行きが怪しくなり、雨が激しく降り出した。はるかシドニー方向には一部青空が垣間見え、オーストラリアのこの季節に特有のシャワーと思っていたが、そのうちに雨が雷(ヒョウ)に変わり出し、フロントガラスやボディに当たる音が聞こえてくる。幸い車に傷が着くほどの大きさではないが、30 分くらい続いたであろうか。シドニーとキャンベラの中ほどにある Bowral という町の Scottish Arm というそれなりのレストランに着いた。軽くとのつもりで入ったが、どうしてもビーフ料理に目が行き、しかも昨日に続いて「トマホーク」に目が止まる。結局は 1 時間を優に超える宴会となり、今夜も一人当たり 50A\$ を超える夕食となった。

朝 7 時にホテルを出て、戻ってきたのは午後 11 時前と今日も強行軍であった。

あいづはん いしや かがやまつばさ こうへん
 「会津藩の医者 加賀山翼（後編）」

ぶん・え ^{みつ}三井 もとこ

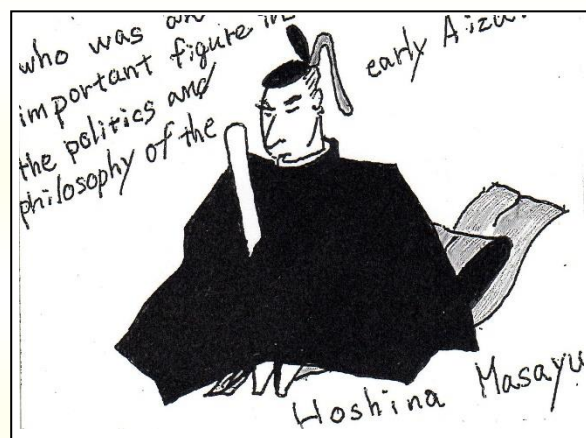
ぜんかい
 <前回までのあらすじ>

おれは、加賀山仁。会津若松の高校2年生だ。3月に善龍寺のお尚から、おれの先祖が松平容保の御側医、加賀山翼だつてことを教えてもらった。「翼が、次々とあたらしいことができたのはなぜなのか？」というおれの疑問に、お尚は、初代会津保科家藩主、保科正之の名前を挙げた。

お尚は、今度来た時に保科正之のことを話してやろうといったけど、お尚の話は、長くて面倒くさいから、おれ、自分で図書館に行って調べたんだ。保科正之のこと。

保科正之は、2代将軍秀忠の隠し子だった。今の長野県伊那にあった高遠藩保科正光の養子になり、のちに3万石の高遠藩主になった。3代将軍家光の兄弟というわけだけど、家光も将軍になるまで、そのことは知らなかったらしい。みんなが知るようになってからも、正之は全然威張らなかったので、家光は、正之をすごく信頼して、寛永20年(1864)には、23万石の会津藩主を命じたそうだ。

会津の前藩主は、税として納める米の取り立てが厳しく、刑罰も残酷だったため、藩を逃げ出した農民も多かったという。正之が藩主になってからは、ちゃんと米の取れる農地か、収穫率の悪い農地かを調べさせて、納める税の量を決めたそうだ。それに明暦元年(1655)には、米を大量に買い取り、飢饉のときは米を低利で農民に貸しだすための倉を各地区に用意したんだつて。社倉制度と言って、日本で初めての銀行だし、福祉制度だよ。こんなやさしい藩主だったから、農民は豊作の時にはよく税を納め、かえって税収は伸びたそうだ。



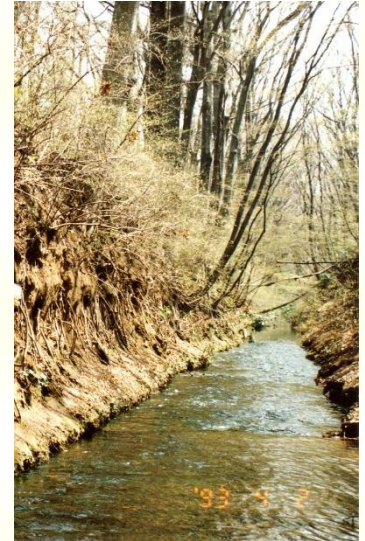
三代将軍家光は、後継ぎの4代将軍家綱の補佐役を正之に託して亡くなった。すると、正之はその後の23年間、会津に帰ることなく、江戸城で務めを果たしたという。会津藩が、松平容保の頃まで、「幕府第一」とっていたのは、正之からの教えだったそうだ。

江戸にいる間、会津はほったらかしだったかっていうと、そうじゃなく、老中とぼつちりタッグを組んで藩を守ったらしい。親孝行の者には賞をあげたり、90歳以上の人にはお米をあげたりしたそうだ。それに、農民にはやさしく武士には厳しい裁判をしたらしいよ。なぜなら武士は農民の生活を守る役目があるから、規律が乱れてはいけないからだつて。

それにすごいのは、旅の途中で病気になった人には、医療費ただ、宿賃ただで治療して、故郷まで送ってあげなさいという日本で初めての救急医療制度まで作っていたことだ。

江戸では、このころ明暦の大火(1657)が起きた。3日間に及ぶ大火事で、大名屋敷 160 軒、旗本屋敷 770 軒、町屋約 400 町が焼けて、死者は数万人だったというから、はんぱじゃない。

正之は何をしたかという、「誰が悪いのと言っている場合ではない。今後の為に防災計画を立てるべきだ」「米蔵が焼けたので、米が足りなくなると、米の値段が高くなってしまいうから、諸大名は国元へ帰るように」「家を焼け出され食べ物がないものには、お粥を配るように」と一カ月もの間、粥を配らせたという。そして、旗本の家を直す費用だけではなく、町屋の再建費用も出すことにしたって言うんだ。そんなことをしたら、貯金がなくなってしまうという反対があった時、正之は何て言ったと思う？「貯蓄とはこのような災害時に士民を安心させるために使うべきもの。そうでなくては貯蓄する意味がない」って言ったんだって。カッコいいなあ。



その後、正之は「大江戸復興プラン」を発令したそうだ。「東京百年史」によると、まずは「江戸総図」と言う洋式測量の図を作らせて、武家屋敷を城内から移転させ、沼を埋め、ひよけあきち火除空地としての広小路を作り、主要道路の道幅を倍近く広げ、防火堤を作り、橋を架けたって言う。焼けた天守閣を再建しようという意見には、「もう戦国時代じゃないから天守閣はいらない。江戸の民が水に困っているから、玉川から上水を引いてこよう」と発案し、測量を命じたそうだ。

寺の境内でおれが借りてきた本を夢中で読んでいると、突然、後ろからお尚の声がした。「なかなか、感心じゃのう。自分で調べたか？ 保科正之のことを。」

「ああ～、びっくりした。お尚、いつからいたんだよ？ これ読んで、知らなかったこと、いっぱいあった。おれ、会津が好きになった。おれたちの先祖ってすごいなあ。新しいことを次々と考えて、今の東京の基礎を作ったようなものじゃないか？」

「いやあ、それだけじゃない。今の政治が忘れていることも、たくさんあったろう。」とお尚。

「うん、ほんとだ！。おれ、もつともつと知りたくなかったよ・・・」

そんなおれに、お尚は、ただただうなづいて、そこにじっと立っていた。（おわり）

※参考文献「会津武士道」「保科正之言行録」中村彰彦著、「松平容保の生涯」

小桧山六郎著、「会津藩医加賀山翼先生並著書」友田康雄著

インフラに関わる “市民参画” における市民・自治体の理解啓発

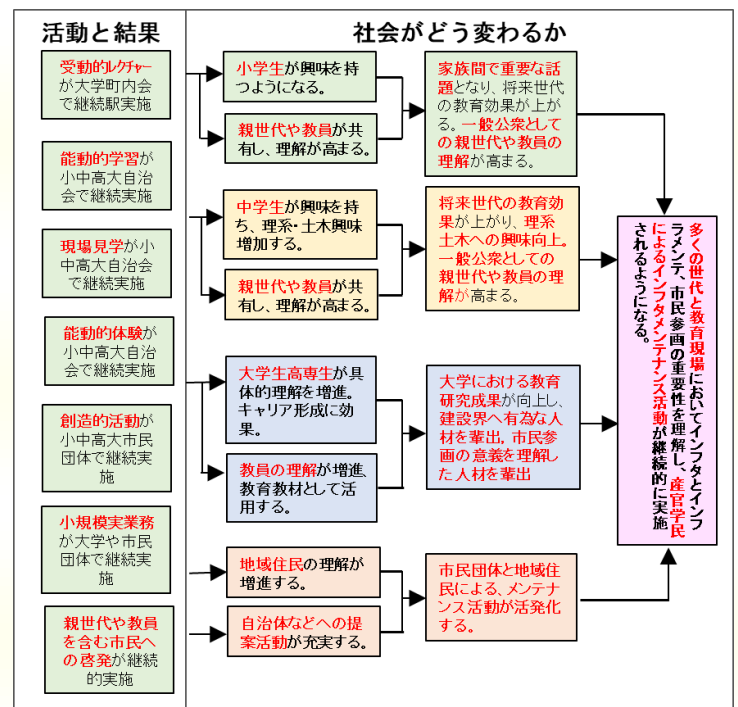
CNCP の地域活動推進部門では、自治体インフラメンテナンス研究会において、1) 国民理解啓発、2) 官民協働、3) 事例調査という 3 つの時限的ワーキンググループを作って、検討を進めてきました。インフラやインフラメンテナンスに関する国民の理解を高め、自治体と国民の双方がこの課題に対する市民参画の重要性と必要性を認識して、実践的な官民協働を各地方において推進することを目指しております。本号では、このうちの、国民理解啓発に関する現在までの検討成果の一端をご紹介します。

図に、国民が参画するインフラに関わる活動と結果、それによる社会的インパクトを示します。活動は大きく以下のように分類しています。

- ① 受動的学習（講習、講義、セミナー等）
- ② 能動的学習（ワークショップ、グループワーク、Problem Based Learning 等）
- ③ 受動的体験（現場見学等）
- ④ 能動的体験（点検・補修・清掃活動、橋守・道守等）
- ⑤ 創造的活動（橋の模型作り等）
- ⑥ 実際の業務（実橋の架設等）

これらの活動による社会へのインパクトは、大きくまとめれば、多くの世代や教育現場で建設界・インフラ・インフラメンテナンスのことが話題に上り、共有する課題として考えるようになること、高校までの教育の成果として建設系学科へ “人財” があつまり、大学高専などの教育研究により有為な若者が建設界の将来を担うようになる。地域社会では、市民団体が地域の産官学と連携して市民・自治体などにおける理解が増進し、活動の中にインフラメンテが組み込まれてゆきます。これらの活動を推進・支援するためには、建設界・インフラ・インフラメンテナンス・それに関わる人々・官民連携の事例などに関する様々な情報を適切な形態で提供して、CNCP などの組織が連携しながら、官民協働活動を実践してゆくことが大変重要であると考えています。したがって、国民理解啓発、官民協働、事例調査は相互に関連し合って市民参画を推進してゆくために不可欠な要素と言えます。

一方、インフラメンテナンスに関して課題山積の自治体における技術者・職員の方々は既存のシステムの中で人財・財源が限られている中で、民を含む新しい枠組みや新技術導入などの取組へ一歩を踏み出しつつありますが、全国的に見れば躊躇しているように思われます。ぜひ、産学民の力を有効に活用しつつ、将来の世代に胸を張ってハードとソフトを含めた社会基盤を引き渡せるよう産官学民の協働を推進してゆかなければなりません。更なる同志の参集を！



皆川 勝 (minatororo@gmail.com)

私のライフ&ワークと CSR

CNCP サポーター
パシフィックコンサルタンツ株式会社
経営企画部 D&I 推進室長 飯島 玲子



私がサポーターになったきっかけは、昨年7月から参加している土木学会 社会貢献・市民交流 WG での CNCP の皆様との出会いでした。初回の会合では、私自身、まちづくりのコンサルティング経験が長いにも関わらず、社会貢献の捉え方の議論についていけませんでした。それでも、豊富な知識・経験をお持ちのベテランの皆様が熱く真摯に議論されている様子に感銘を受け、魅せられてサポーター参加に至りました。

そして、自身の子育て中の経験を振り返り、ソーシャルビジネスが身近にあったことに気付きました。長子が保育園に入ってから18年ほど、地域の保育園保護者をつなぐプラットフォーム組織の幹事を務め、その間、ほかの子育て支援 NPO と協働する機会がありました。その NPO は、保育園を利用しない在宅子育て家庭こそ子育ての悩みを抱えやすいと、親同士の交流や学習機会の提供、一時預かり、行政の政策検討の支援など、様々な活動を展開していました。このほかにも、病児保育を提供する NPO や、学童保育を補い「小1の壁」に対応する企業も現れ始めました。

現在の私の仕事は、社内のダイバーシティ&インクルージョン経営（以下、D&I 経営）の推進です。ダイバーシティとは、組織や集団にいる人の多様性です。性別、年齢、国籍など目に見えやすい表層的な特性だけではなく、経験、スキル、価値観など見えにくい深層的な特性も含まれます。D&I 経営は、こうした一人ひとりの違いを尊重、受容し、強みとして相互に活かすインクルージョンにより、ビジネス環境の変化に迅速かつ柔軟に対応し、イノベーションを生み出そうとする経営です。

最近では、新卒採用の3~4割が女性、そして結婚・出産で辞める女性はほとんど見られませんが、私が技術職として入社した1990年代からしばらくは女性の採用が少なく、かつ離職も多い状況でした。嘆いているだけではだめだと、ランチ会で女性のネットワークを作り、社長参加の意見交換会を開き、本社に制度改善を働きかけました。当時の草の根活動の想いが、今の仕事の礎になっています。

D&I 経営は、弊社では組織を強くする「経営戦略」と捉えています。女性活躍などの社会的課題解決に貢献する点では CSR とも考えられます。このようなことについても、いつか皆様と議論できることを楽しみにしています。積極的に勉強・活動したいと思いますので、今後ともご指導の程、宜しく願いいたします。



CNCPアワード

市民社会を築く建設大賞 2018募集

平成29年12月1日(金)～平成30年3月31日(土) 午後5時必着

趣旨

建設分野における社会的課題の解決を図る優れた事業（特にソーシャルビジネス（SB）および企業の共通価値の創造（CSV）^{注1}事業）を顕在化して称賛し、広く周知させることを目的としています。また、今後、建設分野における社会的課題の解決を図る優れた事業を広く社会に公表することで、建設界に対する社会の理解を進めることも目的としています。

注1:共通価値の創造(CSV)とは社会的課題を工夫のある事業で解決を図ると共に合わせて企業価値の向上を図る事業を称します。

建設分野とは、広く市民社会に関わる「ひとづくり」、「まちづくり」を対象とした分野であり、具体的には「安心・安全」、「河川・水辺」、「道路・交通」、「住まい」、「自然・環境」などに関する事業を通じて、より良い社会へと改善していく分野を指します。

ベスト・プラクティス賞

●最優秀賞：1点 ●優秀賞：数点

建設分野における社会的課題の解決を図る優れた事業
(特にソーシャルビジネス(SB)および企業の共通価値の創造(CSV)^{注1}事業)

ベスト・アイデア賞

●最優秀賞：1点 ●優秀賞：数点

建設分野における社会的課題の解決を図る優れた事業企画
(特にソーシャルビジネス(SB)および企業の共通価値の創造(CSV)^{注1}事業)

副賞としてそれぞれ
最優秀賞10万円、
優秀賞5万円が
授与されます。

応募条件

次の3つの要素を全て満たすこととします。

- ①社会的課題を正しく捉えていること。
- ②建設分野における工夫のある事業であること。
- ③ビジネスの形態で継続的に活動している事業であること。(継続年数は不問)

※ベスト・アイデア部門では継続性が期待されること

※左記を満たす個人・法人・団体、国内・海外を問わずどなたでも応募できます。

選定委員会



粉川 一郎氏
武蔵大学教授



鈴木 学氏氏
国土交通省 総合政策局
事業総括調整官



山田 菊子氏
東京工業大学 研究員



田村 裕美氏
(一社)ソーシャルテクニカ
代表理事



山本 卓朗氏
CNCP代表理事

募集要項・

応募用紙はこちら⇒ URL:<http://npo-cnnp.org/award2018/>

下記の URL、または右の QR より応募用紙をダウンロードし、必要事項をご記入の上、メールにて事務局に送付してください。



《お問合せ先》NPO法人 シビルNPO連携プラットフォーム

〒101-0054 東京都千代田区神田錦町三丁目13番地7 名古屋ビル本館2階 コム・ブレイン内

担当: 内藤 E-mail: award@npo-cnnp.org

【主催】NPO法人シビルNPO連携プラットフォーム 【後援】国土交通省・公益社団法人 土木学会

【お知らせ】NPO ファイナンス研究会セミナー開催予定

1. テーマ：ソーシャルインパクト評価と建設分野におけるモデル事業への挑戦
 2. 日時及び場所：3月23日（金）13:30～16:30、名古屋本館ビル2階（神田）
 3. 内容
 - (1)講演：ソーシャルインパクト評価とは何か（新日本有限責任監査法人 高木麻美氏）
 - (2)事業例研究成果発表
 - ①ウナギ完全養殖インフラ整備事業（CNCP シンクタンクチーム 小重忠司氏）
 - ②電線の地中化事業（NPO 法人電線のない街づくり支援ネットワーク 井上利一氏）
 - ③インフラメンテ国民会議市民参画フォーラム事業（インフラメンテ研究会 足立忠郎氏）
 - (3)パネルディスカッション
- （定員、申し込み方法等詳細は次号掲載予定）

事務局通信

1. 2月の会議予定
 - 1) 2月1日(木) 15:00～17:00：ファイナンス研究会
 - 2) 2月6日(火) 14:00～17:00：シンクタンクチーム定例会
 - 3) 2月9日(金) 14:00～17:00：自治体インフラメンテ研究会 WG
 - 4) 2月13日(火) 13:30～15:00：見直しワーキング
 - 5) 2月13日(火) 15:10～16:40：運営会議
 - 6) 2月15日(木) 10:00～12:00：自治体インフラメンテ研究会
 - 7) 2月27日(火) 15:00～17:00：理事会
2. 2月1日現在の会員数
法人正会員 17、個人正会員 28、法人賛助会員 33 合計 78
サポーター 68

事務局

お問い合わせは
こちらまで

特定非営利活動法人

シビルNPO 連携プラットフォーム

〒101-0054 東京都千代田区神田錦町三丁目 13 番地 7
名古屋ビル本館 2 階 コム・ブレイン内

事務局長 内藤 堅一：info@npo-cnnp.org

ホームページ URL：<http://npo-cnnp.org/>